19　チェコスロバキアにおける日本研究

ヴラースタ・ヴィンケルホーフェローバー（プラハ外国語大学）

(1)　日本研究の初期

1918年10月28日、チェコスロバキアが独立共和国になって、国内の学問も大いに刺激を受けた。1922年１月、マサリック共和国大統領の提案で、特別の法律によって東洋研究所が設立された。設立の目的は東洋研究のほかアジア諸国との経済交流発展でもあった。数年間建物がなかったので、研究所が実際に活動を開始したのは1929年である。同年、東洋研究所は季刊誌 ARCHIV ORIENTÁLNÍ〔東洋文庫誌〕を刊行し始めた。当時、プラハのカレル大学では、世界的に有名な学者たち[1]の手で伝統に裏打ちされた東洋学の研究が続けられるかたわら、東洋研究所では新しい専門分野が計画的に確立され発展していった。

チェコにおける本格的な日本研究も東洋研究所で行われるようになった。30年代には研究所で日本の総領事が日本語教室を開き、この教室で後に日本学の創始者になったプルーシェック夫妻（Vlasta, Jaroslav Průšek）が日本語を学び始めた。同じ30年代にプルーシェック夫妻が東洋研究所の奨学金を得て、日本に数年滞在し、日本語と日本文学について学んだ。

チェコの日本研究の開拓者になったプルーシェック[2]は元来歴史家であり、極東文化史、主に中国の文学に興味を持っていた。日本滞在中も日本の文学のほか中国文学の資料を集めた。後に中国文学の研究に専念したが、戦後1947年にプラハのカレル大学哲学部の中国・日本の語学と文学の教授になって、大学で極東研究の基礎を作った。

1939年にチェコにおける最初の日本語教科書を書いたのはヒルスカー女史（Vlasta Hilská[3]）である。ヒルスカー女史はＪ・プルーシェックの先妻で、一緒に日本に滞在し、日本語と現代文学を研究した。1940年代の初めに、ヒルスカー女史は夏目漱石の「草枕」、谷崎潤一郎の「お艶殺し」と芥川龍之介の短編６編を訳して1942年に発表した。この本はチェコスロバキアでは最初の日本文学作品の直接翻訳であった。これより以前に紹介された日本文学作品はドイツ語・英語あるいはフランス語訳からの間接的翻訳であった。このほか、ヒルスカー女史は詩人の Bohumil Mathesius（1888—1952）と協力して、『万葉集』と『古今集』の和歌の選集をチェコ語訳で紹介した。『水に書かれた詩』というこの叙情詩的な小さな本は戦争中の暗い時代に好評を得て、今日まで何回も再版をかさねた。

30年代末からプラハの東洋研究所付属東洋言語学校が開かれ、この学校ではすでに戦争中から J. Průšek，A. Pultr の講師が日本語を教えていた。

(2) 第二次世界大戦後の日本研究

チェコスロバキア共和国は1939年３月にナチ・ドイツに占領され、同年11月17日にチェコの大学全校がナチスに封鎖されて、大勢の大学教師・大学生がナチ収容所に収容され、大学教育・研究は５年以上も中断された。1945年の終戦後に大学は再開され、チェコの東洋学も新しい繁栄の時代に向かった。

1947年の秋からカレル大学哲学部で、日本学と中国学の講座が出来て、Ｊ・プルーシェックが中国・日本学の語学と文学の教授になり、最初の学生を４人指導し、『竹取物語』・謡曲・西鶴の作品などの日本文学について論じ講義した。

東洋研究所は1945年より、20年代末以降発行された『東洋文庫誌』のほかに、『新東洋』(Nový Orient) という月刊誌を刊行し始めた。『東洋文庫誌』が主に研究家を対象とした学問的季刊誌であるのに対し、『新東洋』はむしろ一般読者向けの専門誌で、アジア・アフリカの諸国の文化・歴史・社会などを紹介する雑誌である。この２つの雑誌はこの45年間日本語・日本文化・文学・美術などを論じる数多くの論文・記事を掲載し続けている。

1952年、チェコスロバキアに新しく科学アカデミーが出来た時、東洋研究所はこれに所属することになった。プルーシェックが所長となり、1953年に大学での教育を止めた。その時まで東洋研究所に付属していた東洋言語学校[4]も1952年にプラハ言語学校に東洋部として併合されたが、中国語、アラビア語、トルコ語、ペルシャ語、インドネシア語、ベンガリ語、ヘブライ語、ヒンディー語、サンスクリットなどの教室のうち、日本語教室に通う学生の数が最初からいちばん多かったのである。

プルーシェック教授のあとを受けついで、ヒルスカー女史がカレル大学の日本学講座を担当することになった。1953年に哲学部の極東学科の科長になり、1960年以降アジア・アフリカ研究部を担当していた。ヒルスカー女史は戦前、日本滞在中に日本プロレタリア文学の代表的な作品を読み、戦後小林多喜二の『蟹工船』、徳永直の『太陽のない街』などの小説を翻訳し、プロレタリア文学を中心に日本文学に関する論文を書いた。1953年にチェコスロバキアの最初の日本史も発表した。

戦争中に中断した日本・チェコ交流は、50年代の半ばまで殆ど復活せず、日本研究も大変困難であった。東洋研究所の図書館の日本蔵書は戦前の出版物しかなく、新しい資料、特に文学の新作品・雑誌などがチェコに入らなくて、参考にすることが出来なかった。

日本・チェコスロバキア国交が1957年に再開された後、1958年にヒルスカー女史が渡日して、チェコ・日本文化交流がある程度復活したが、研究資料は以前同様大変少なく、研究は主に大正・昭和初期までの資料に基づいていた。1950年以降、日本学を選択する学生がかなり定期的に（１年おき）カレル大学に入学して、1960年代末にはすでに20人以上の日本学の専門家が育てられた。

1968年５月にヒルスカー女史が急逝した後、哲学部の日本学教育を担当したのがＪ・プルーシェックの弟子のノヴァーク (Miroslav Novák)[5] である。ノヴァークは語学研究のほか、特に江戸時代の文学を研究し、芭蕉・西鶴などの作品をチェコ語に訳した。俳句の本質

に触れる論文を書き、東洋演劇の専門家 D. Kalvodová 女史と協力して、『松風』という題で日本演劇史も書いた。ノヴァークは立派な教育者としても名高く、現在チェコスロバキアで日本研究を発展させる日本学者の若い世代[6]は殆どノヴァークの弟子である。彼の弟子はチェコスロバキアだけではなく、外国でも活躍している。いわゆるプラーグ言語学派の構造主義に基づく2人の日本学者、オーストラリアのモナシュ大学教授 J. V. Neustupný とイギリスのシェフィールド大学の Jiří Jelínek もノヴァークの弟子にあたり、日本文学の研究家では、シェフィールド大学の Miriam Jelínek 女史とカナダのトロント大学の A. Líman もプラハ大学出身でノヴァークの弟子である。ノヴァークがチェコの日本学の方法論的な基礎をつくり、彼の書いた『日本語文法』『日本文学』『日本文字入門』などの大学教科書は基礎教材となって、再版されている。またノヴァークは私小説の研究や近代現代文学の翻訳など広く活躍した。彼は1982年2月に急逝する直前、清少納言の『枕草子』と鴨長明の『方丈記』を訳したが、この翻訳はノヴァークの死後出版された。

1950年代と60年代をチェコスロバキア東洋研究の黄金時代といっても過言ではないだろう。チェコスロバキア科学アカデミー会員に6人もの東洋学者が選ばれ、プルーシェック所長下の東洋研究所の研究活躍は上昇の機運にあった。共同研究プロジェクトは、60年代の半ば、チェコスロバキアの東洋文学研究家が力を合わせて、世界最初の『アジア・アフリカ作家辞典』を編纂して、1967年に発表した。1970年代にはこの辞典をもとに、英語版もイギリスと日本で出版された。その他の共同プロジェクトは、東洋近代文学の成立と発達の研究であった。このプロジェクトには日本学者のノヴァークも参加し、本は『出会いと変換』という題で1976年に発表された。

1968年8月21日のソ連など5か国軍事介入の後、チェコスロバキアは政治的・社会的暗黒時代に入って、東洋学研究にとっても困難の多い時代が始まった。以前チェコスロバキアの科学の誇りとなっていた東洋研究は「ブルジョアなまかじりの学問」と指摘されて、計画的に荒らされていった。大学の教師や東洋研究所の研究員達（プルーシェック所長も含めて）は政治的理由で仕事を辞めさせられ、大学で研究されて来た専門的学問が強制的に減らされていった。学生の人数も制限された。チェコの東洋学は昔からフィロロギー研究、すなわち語学と文学の研究が水準のいちばん高い分野であったが、1970年以降、文学と語学関係の講義も制限された。日本研究も例外ではなく、ノヴァークの死後、日本科の教育内容が一面的になって、政治学・経済学などの講義やゼミナールが増え、それに反して日本文学、特に古典・美術・日本思想などの教育は貧弱になってしまった。東洋研究所の研究の範囲も狭くなり、この20年間のチェコスロバキアの日本研究家の業績は概して、多くの論文・著書・翻訳などは個人研究家の自由な時間の努力の収穫であると言えよう。

現在、日本研究と日本語教育を行なっているチェコスロバキアの施設はプラハの場合、カレル大学の哲学部のアジア・アフリカ研究部、チェコスロバキア科学アカデミー所属の東洋研究所、ナープルステック博物館、国立美術館の東洋部とプラハ言語学校の東洋部である。1986年にスロバキアの中心地であるブラチスラヴァ市のコメニウス大学にも日本学科が出来て、主に通訳者・翻訳者育成をめざしている。

(3) チェコスロバキアの日本研究の現状

東洋研究所の研究員のうち、日本学の専門家が2人いる。ノヴァークの代表的な弟子であるフィアラ（Karel Fiala）は京都大学に数年間留学し、日本の大学の博士課程を修得した最初のチェコ人である。言語学者のフィアラの専門分野は、中世・現代日本語の構文論と文章論の構造的研究である。国内・外国でも数多くの論文を発表し、最近『平家物語』のチェコ語訳・注釈書を完成した。今年の4月から、フィアラ博士はこの国際日本文化研究センターで1年間研究を続ける予定になっている。東洋研究所のもう1人の日本研究員、Kátă Kabelácŏvá 女史の研究対象は日本文化、特に能楽と音楽である。

カレル大学アジア・アフリカ研究部の日本科で、今年の冬の学期まで担当教師であったZoleňka Vasiljevová 女史は歴史が専門であり、日本のファシズムと封建制度の研究をしている。1986年にマルクス主義の観点にたった『日本史』を発表した。Alice Kraemerová 女史も主に言語研究をして、日本語教育の担任教師になっている。今年の4月には、70年代の初めまでアジア・アフリカ研究部のシーニア・講師であった。Vlasta Winkelhöferová 女史がカレル大学に戻って、日本文学の講義・ゼミナールの担当になる。カレル大学の日本学の教育は5年制になっていて、この学期は5年生と2年生の学生が合わせて15人在籍している。

プラハのナープルステック博物館の東洋部の日本科長ボハーチコヴァー女史（Libuše Boháčkouá）は本博物館の所蔵している豊富な日本収集の美術品・工芸品などの研究をしている。根付け・大坂プリント・版画・刀の鍔・染め物の型紙などについて論文を書き、1987年に V. Winkelhöferová 女史と共著で『扇と刀』という日本文化史を発表した。ボハーチコヴァー女史の活躍のお陰で、ナープルステック博物館の日本収集が多くの展覧会に出品され紹介された。博物館の発行している Annals of the Náprstek Museum という年報には日本物質文化を論じる記事が殆ど毎回載せられる。

1986年の秋、スロバキアの首都のブラチスラヴァ市のコメニウス大学にも日本研究科が出来、現在6、7人の学生が日本語を勉強している。教育では主に現代語が強調され、通訳翻訳者を育てている。担当教官は東南アジア・太平洋地域の比較言語学者クルパ（Viktor Krupa）である。日本語教育を担当している Karol Kutňa は日本文学を研究し、クルパ教授と同じく日本文学作品のスロバキア語翻訳で知られている。

プラハ言語学校（外国語学校）の東洋部の学生のうち、日本語を勉強するものは5分の1以上（200人前後）を占めている。この学校の日本科は課程の種類が多く、初級、中級、上級と国家試験準備課程があり、日本語の国家試験とディプロマが受けられるチェコスロバキアの唯一の一般成人向けの教育施設になっている。東洋部の日本学の専門家は4名で、Ivan Krouský は特に日本児童文学の翻訳者として知られ、井伏鱒二、松本清張などの作品も訳し、言語学校の日本語課程の教材になっている日本語教科書も書いた。シュヴァルツォヴァー女史（Zolenka Sp'arcová）と Zora Čermáková 女史も現代日本文学の翻訳をし、シュヴァルツォヴァー女史は日本語教育の方法論を研究している。

プラハの国立美術館の東洋部長を長年勤めていた Lubor Hájek は外国でもよく知られている日本と中国の美術の研究家・理論家である。L. Hájek が書いた日本陶芸・版画・グラフィックなどに関する論文は外国語にも訳され、極東美術の専門家に高く評価されている。

参考文献

1) ・František lexa (1876—1960) 古いエジプトの宗教、デモティック語を研究したエジプト学者
   ・Bedřich Hrozný (1879—1952) 楔形文字とヒッタイト語を世界で初めて解読した学者
   ・Vincenc Lesný (1882—1953) インド、ペルシャ語、ローム語（すなわちジプシー語）、パーリー語の研究者
   ・Otakar Pertold (1884—1965) インド、ビルマ、スリーランカの研究
   ・Jaroslav Černý (1898—1970) エジプト学者、ロンドン大学、オックスフォード大学の教授
   ・Jan Rypka (1886—1968) ペルシャ、トルコ文学の研究
2) Jaroslav Průšěk (1906—1980) 中世、近代中国文学と中国文化史の研究、1952—1971年東洋研究所の所長、1955年チェコスロバキア科学アカデミー会員
3) Vlasta Hilská (1909—1968) 日本文学の研究、カレル大学教授、日本文学の翻訳者
4) プラハ外国語大学とも呼ばれる。
5) Miroslav Novák (1924—1982) 日本文学（俳句、私小説）と言語の研究、日本文学の翻訳者
6) Karel Fiala (1946)

チェコスロバキアで紹介された日本文学作品

ABE kôbô　安部公房　砂の女　デンドロカカリヤ　他人の顔　詩人の生涯　友達　闖入者　人魚伝　棒　無関係な死　誘惑者　赤い繭　ごろつき　殻の卵　魔法のチョーク

AKUTAGAWA Ryûnosuke　芥川龍之介　羅生門　鼻　地獄変　河童　蜘蛛の糸　蜜柑

DAZAI Osamu　太宰　治　斜陽　親友交歓　おさん　桜桃　ヴィヨンの妻　家庭の幸福　トカトントン　饗應夫人　薄明

ENDO Shûsaku　遠藤周作　海と毒薬　沈黙

FUKAZAWA Shichirô　深沢七郎　楢山節考　落語風ポルカ　日本風ポルカ　江戸風ポルカ

FURUI Yoshikichi　古井由吉　露地の奥に

FUTABATEI Shimei　二葉亭四迷　平凡　其面影

HASEGAWA Shirô　長谷川四郎　鶴　悪正の話

HAYAMA Yoshiki　葉山嘉樹　セメント樽の中の手紙

"Heike Monogatari"　平家物語

HIGUCHI Ichiyô　樋口一葉　にごりえ

HOSHI Shin-ichi　星　新一　番号をどうぞ　空への門　ボッコちゃん　おーいでてこーい

IBUSE Masuji　井伏鱒二　黒い雨　屋根の上のサワン

IHARA Saikaku　井原西鶴　好色五人女　好色一代女

INOUE Yasushi 井上　靖　闘牛　猟銃　通夜の客
IWANO Hômei 岩野泡鳴　毒薬を飲む女
KAIKÔ Takeshi 開高　健　裸の王様　巨人と玩具　パニック　迷路
KAJII Motojirô 梶井基次郎　檸檬
KAMO no Chômei 鴨　長明　方丈記
KAWABATA Yasunari 川端康成　雪国　千羽鶴　名人　眠れる美女　伊豆の踊子　行く人　水月　弓浦市　十六歳の日記　川のある下町の話　山の音　夏の靴　死顔の出来事　ありがとう　処女の祈り
KINOSHITA Junji 木下順二　夕鶴
KITA Morio 北　杜夫　楡家の人びと　竹
KOBAYASHI Takiji 小林多喜二　蟹工船　党生活者
MATSUMOTO Seichô 松本清張　点と線　遭難
MATSUO Bashô 松尾芭蕉　奥の細道
MINAKAMI Tsutomu 水上　勉　雁の寺　桑の子　越前竹人形　猿籠の牡丹　竹の花
MISHIMA Yukio 三島由紀夫　潮騒
MIURA Tetsuo 三浦哲郎　拳銃
NATSUME Sôseki 夏目漱石　草枕　夢十夜　坊ちゃん
NIWA Fumio 丹羽文雄　厭がらせの年齢
NOMA Hiroshi 野間　宏　真空地帯　顔のなかの赤い月
ÔE Kenzaburô 大江健三郎　遅れてきた青年　アトミック・エイジの守護神　飼育
ÔOKA Shôhei 大岡昇平　野火
SEI Shônagon 清少納言　枕草子
SATA Ineko 佐多稲子　キャラメル工場から
SHIGA Naoya 志賀直哉　城の崎にて　真鶴　清兵衛と瓢箪　雪の遠足　正義派　灰色の月　剃刀　母の死と新しい母　網走まで　児を盗む話　小僧の神様　転生　襖　老人　或る朝　焚火　好人物の夫婦　台風　范の犯罪
TAKEDA Taijun 武田泰淳　ひかりごけ　蝮のすゑ　流人島にて　士魂商才
TANIZAKI Jun-ichirô 谷崎潤一郎　細雪　春琴抄　蓼喰ふ蟲　夢の浮き橋　蘆刈　刺青　盲目物語　お艶殺し　母を戀ふる記
TOKUNAGA Sunao 徳永　直　太陽のない街　妻よねむれ
TSUJI Kunio 辻　邦生　夏の砦
UEDA Akinari 上田秋成　雨月物語
UMEZAKI Haruo 梅崎春生　日の果て　桜島　ボロ家の春秋　記憶　狂い凧
YASUOKA Shôtarô 安岡章太郎　質屋の女房
YOKOMITSU Riichi 横光利一　機械　蠅
YOSHIDA Kenkô 吉田兼好　つれづれ草
「古今和歌集」の和歌
石川啄木の短歌
芭蕉の俳諧

石川啄木、萩原朔太郎、堀口大学、三好達治、高橋新吉、北園克衛、北川冬彦、中野重治、壺井繁治、西脇順三郎の詩

CHIKAMATSU Monzaemon　近松門左衛門　心中天の網島

KANZE Motomasa　観世元雅　隅田川

ZEAMI Motokiyo　世阿弥元清　忠度　綾鼓　松風

Kyôgen　狂言　二人袴

児童文学

いぬい・とみこ、今江祥智、仁木悦子、山中恒などの作品

日本に関する主な著書（1945年以降）

V. Hilská : Japonské divadlo, Praha 1947『日本演劇』

V. Hilská : Dějiny a kultura japonského lidu, Praha 1953『日本国民の歴史と文化』

J. a V. Winkelhöferová : Sto pohledu na Japonsko, Praha 1964, 1970, 1973『日本百景』

Slovîk spisovatelu Asie a Afriky, I., II., Praha 1967『アジア・アフリカ作家辞典』I，II

D. Kalvodová, M. Novák : Vîtr v pîniîch, Praha 1975『松風』（日本の演劇史）

Z. Vasiljevová : Dějiny Japonska, Praha 1986『日本史』

L. Bohá č ková, V. Winkelhöferová : Vějíř a meč-Kapitoly z dějin japonske kultury, Praha, 1987『扇と刀・日本文化史の章』

大学の教科書

V. hrdličková, V. Winkelhöferová, A. Pultr : Zeměpisný a hospodářský přehled Číny, Koreje a Japonska, Praha 1957『中国、日本、朝鮮の地理と経済の入門』

Z. Vasiljevová : Novodobé dějing Japonska, Praha 1964『近代日本史』

V. Winkelhöferová : Čítanka novinových a odborných textů z japonštiny, Praha 1970『新聞と専門日本語のテキストの読本』

Z. Vasiljevová : Poválečné Japonsko, Praha 1972『戦後の日本』

Z. Vasiljevová : Politický vývoj Japonska 1868—1945, Praha 1976『日本の政治発展　1868—1945』

M. Novák : Japonská literatura I., Praha 1977『日本文学Ⅰ』

M. Novák, V. Winkelhöferová : Japonská literatura II., Praha 1977『日本文学II』

J. Vochala, M. Novák, V. Pucek : Úvod do čínského, japonského a Korejského písma, Praha 1978『中国、日本、朝鮮の文字の入門』

M. Novák : Gramatika japonštiny I., Praha 1980『日本語の文法Ⅰ』

M. Novák : Gramatika japonštiny II., Praha 1982『日本語の文法II』

Z. Vasiljevová : Feudalismus v zemîch Dálného Východu, Praha 1983『極東諸国における封建主義』

A. Kraemerová : Základnî kurs japonštiny, Praha 1988『日本語の初級』

M. Novák : Japonská literatura I., Praha 1988『日本文学Ⅰ』

M. Novák, V. Winkelhöferová : Japonská literatura II., Praha 1989『日本文学II』（新増版）